

『マニ・カンブン』における 「ヴェッサンタラジャータカ」

——観自在菩薩の化身としてのチベット王ソンツェンガンポと
ダライ・ラマ五世の布施行（試訳付き）——

楨 殿 伴 子

1. はじめに

『マニ・カンブン』（Maṇi bka' 'bum）はチベット土着の仏典であり、埋蔵經典（*gter ma*）の一つである。観自在菩薩の化身とされる古代チベット王ソンツェンガンポ（没650）の遺書として著されたとされるが、『マニ・カンブン』の真の作者についてはニャンレル・ニメ・ウセル（1124–1136）を含む埋蔵経発見者に帰されており、マシュー・カプスタインは1250年以前には大半ができあがっていたと考えている（Kapstein 1992：86）。観自在菩薩を主尊とし、観自在菩薩への帰依を通して阿弥陀仏の極楽浄土（Sukhāvati）への再生を発願する、浄土往生を説く浄土經典である。全編で観自在菩薩の心髄としての六字真言「オーン・マ・ニ・ペ・メ・フーン」の功德と効能が繰り返し説かれ、それを唱えることによって、罪障が滅せられ、浄土往生への契機となる。数版ある中の大部の版は700葉に及び、内容は神話、説話、伝記、教義、訓戒など多岐にわたる。中でも本稿で取り上げるのは、すでに筆者が過年度における拙稿¹で指摘したように、『マニ・カンブン』中に現れる「ヴェッサンタラジャータカ」に類似の二つの説話である。

「ヴェッサンタラジャータカ」は釈尊の本生譚の一つであり、ヴェッサンタラ王子が妻子までも布施するほどの布施行を物語る。『マニ・カンブン』ではソンツェンガンポ王の二つの本生譚にその類似の物語が現れる。一つは「護法王ソンツェンガンポの業績と生涯の巻」（chos skyong ba'i rgyal po srong btsan sgam po'i mdzad pa rnam thar gyi skor）の第17話²（以下、「ソンツェンガンポ王伝記」）、もう一つは「世自在王子本生譚」（rgyal bu 'jig rten dbang phyug gi skyes rabs³）である。そこでは、時代は光造慧頂仏（sangs rgyas 'Od mdzad ye shes tog）の

教えの時代として設定されている。王子の名前は世自在 (Lokesvara, 'Jig rten dbang phyug) 王子であり、彼はジャヤンガジャ (sGra dbyang rnga sgra) 王の息子である。彼には二人の妻と二人の子供がいる。妻の一人は日月光女 (Nyi zla'i srong ma)、他の一人は虚空光女 (Nam mkha' sgron ma) であり、ソンツェンガンポ王の二人の妻に同定される。前者はネパール出身のティツン (Khri btsun) 妃、後者は唐の公女 (kong jo) である。

2. ダライ・ラマ五世と『マニ・カンブン』

『マニ・カンブン』の特異な点の一つにはそれが埋蔵經典にもかかわらず享受してきた人気である。一般に埋蔵經は偽經として糾弾されるのが常であるが、その木版印刷版はサキャ派のデルゲ版、ゲルク派のデプン版を含む七版を数える (Macdonald 1969; Ehrhardt 2013; Makidono 2014; 槇殿 2018a)。『マニ・カンブン』とダライ・ラマ政権の関わりは先行研究によって指摘されてきた。歴代のダライ・ラマは観自在菩薩の化身とみなされているが、このことに関して、ワッデル (L.A. Waddell) は『マニ・カンブン』の著者がダライ・ラマ五世 (1617–1682) であり、ダライ・ラマ五世が観自在菩薩の化身であることを教証として示すために意図して彼自身が創作したものだという説さえ出したほどである (Waddell, 1894: 61–62)。著書については、先述のように三人の埋蔵經発見者に帰されているため、ワッデルの説は誤りを含むが、『マニ・カンブン』とダライ・ラマ五世との緊密な関係を指摘し、特に、彼を観自在菩薩の化身とする根拠の文献的資料に『マニ・カンブン』を用いたとする考えは注目に値する。以下にワッデルのその一節を引用して示す。

I am of opinion that the fiction which credits King Srongtsan Gampo and the Dalai Lāma with being the incarnations of Avalokita dates no farther back than 1640 A.D., and was the invention of Ngag-wng Lo-tsang the first Grant Dalai Lāma....I can only now say that I believe that this crafty Grand Lāma, in order to consolidate his freshly acquired rule and that of his order in the Priest-Kingship of Tibet, did himself invent the theory of his being

the incarnation of Avalokita, the president and protector of the creatures in each of the six worlds of re-birth, and also the Controller of Metempsychosis, the Dread Judge of the Dead, before whose tribunal all mortals must appear. Posing in this way as the God-of-Gods incarnate, he build himself a palace-temple on a hill newar Lhāsa, which he named Potala after the mythic Indian res whose symbols he now invested himself with. And he invented legends magnifying the powers of Avalokita. and wrote amongst others fictious histories, as I believe the Mani-bkah-hbum, a work which is usually teated as historical, and dated a thoudand years earlier, and attributed to Srong-tsan-gampo. which autobigraphy it claims to be.⁴ (以下に和訳を付する：「わたしの意見では、ソンツェンガンポ王と〔歴代の〕ダライ・ラマたちが観音の化身だとする作り話は千六百四十年以前に遡らないし、それはダライ・ラマ五世、ナクワンロツァンの発明だと思う。わたしが現時点で言えることは、この知恵者のダライ・ラマは彼が新規に得た秩序でありかつ、僧が王権を握るチベットの体制の秩序を固めるために、彼が観音の化身であるという理論を編み出した。観音は六趣衆生の統率者でありかつ保護者である。また、輪廻転生の管理者、つまり死の恐ろしい審判者であり、彼の面前にすべての生類が〔その審判を受けるために〕現れなければならない。このように、神々の中の〔主〕神が人間として化身した者として、彼はラサの丘に寺院かつ宮殿を建設した。それをインドの神話的住居に因んでポタラと名付けた。その住居は「視線を下ろす主人」という彼の聖なる原型であり、それを象徴する〔寺院宮殿〕に彼の財をつぎ込んだのである。そして、かれが観音の力を荘厳する伝説をでっち上げて書いたのが『マニ・カンブン』であるとわたしには思える。それは普通は歴史的作品として取り扱われており、一千年にも前に書かれたとされ、ソンツェンガンポ王の自伝であると『マニ・カンブン』自身が主張している〔作品〕である」)

以下の本稿で、ダライ・ラマ政権にとっての『マニ・カンブン』の重要性について、ダライ・ラマ五世の前世譚と『マニ・カンブン』に描かれた「ヴェッサンタラジャータカ」の二つを比較考察し、ダライ・ラマ五世が『マニ・カンブン』

を自身の前世譚を創作する資料として用いたことを文献学的に解明する。さらに、『マニ・カンブン』中の二つの「ヴェッサンタラジャータカ」の試訳を提示する。

3. ダライ・ラマ五世の前世譚「明澄鑑」

ダライ・ラマ五世の「本生譚の略図の一覧付物語としての明澄鑑」(以下、「明澄鑑」⁵)についてのサンスレイマ・ウジェート (Sangsereima Ujeed) による研究は、ダライ・ラマ五世が自身を観自在菩薩と同定し、彼の前世が「ジャヤンガジャ王 (sgra dbyang rnga sgra「旋律的な太鼓を有する者」) の息子」であったという例を示している。その前世譚では、ダライ・ラマ五世の前世は第一番目が観自在菩薩、二番目がジャヤンガジャ王、さらに第四番目がソンツェンガンボ王となっている。⁶ウジェートによって引用されている以下の箇所において、世自在王子と、彼の後の二人の妃との出会いが描かれている。

〔わたしが〕 ジャチェン国 (yul sgra can) 国にジャヤンガジャという王の息子世自在 (‘jig rten dbang phyug) として生まれたとき、十六歳のときに、光造慧頂仏 (sangs rgyas ‘Od mdzad ye shes tog) のもとへ行く道中で日月光女と虚空光女の二人が〔わたしの〕妃となることを願いました。仏陀に、青睡蓮と貨幣を差し上げて、菩提心を起こしました。⁷

この引用文が『マニ・カンブン』中における「ソンツェンガンボ王伝記」と「世自在王子本生譚」の二つから借用され、作られたものであることを次に示す。

まず、「ソンツェンガンボ王自伝」には以下の章句が現れる。

〔わたしが〕 十六歳だったとき、光造慧頂仏 (‘Od mdzad ye shes tog) のもとに参りました。そのとき、二人の女性、(日月光女と虚空光女に出会いました。二人はわたしの妃になることを望みました。⁸

次に、「世自在王子本生譚」には以下のように説かれている。

それから、王子は成長し、彼が十六歳になったとき、……太子は菩提樹のもとに〔いらっしゃる〕慧光造頂 (Ye shes ‘od mdzad tog) を参拝しに行った道中で、王子は二人の美しい女性に出会いました。二人は「王子よ、どこに行くのですか」と言いました。……王子は二人の女性と一緒に智慧光造仏を

お参りしました。王子は九つの金貨を差し上げました。女性たちの一人は七本のウドゥンヴァラの花を、他の一人は五本の紅蓮華を差し上げて、菩提心を起こしました。⁹

先のダライ・ラマ五世の本生譚はこれら二つを原典にしてつくられたものと見ることができる。

さらに、ダライ・ラマ五世の「明澄鑑」における以下の章句では、世自在王子の追放と暗黒山での二人の子供たち妻の布施、さらに王子の帰還と息子に王権を譲渡することが『マニ・カンブン』における人物や場所などの固有名詞を踏襲する形で描かれている。

息子世自在が国王になり、布施をたくさんしたとき、妬みを持つ有木座王 (Shing khri can) がすべての願いをかなえる如意宝 (nor bu dgos 'dod 'byung ba) を請うまにあげたので、息子の父母は暗黒山ジャロクジャチェン (bdud ri nag po bya rog sgra gcan) に追放しました。そのとき、道中でも乗りもの、装飾、衣服の数々を乞食女にあげました。ある道では神が天に宮殿を作り出し、[わたしたちを] 供養したので、妃二人はそこに住むよう望みましたが、父上のお言葉を破ってはならないと [暗黒山に] 着きました。そこで、近沙木 (Bye ma shing drung) 国から来たバラモンに兄妹をあげました。そのせいで、父母たちとその国の神、ナーガ、地神たちが集まって、十方の仏と菩薩たちが流した涙がひとつになって、湖になりました。その湖の真中に蓮の茎 [があり、] その花々に仏がそれぞれ住しておられました。虹の放射状の光の兆しが驚愕するほど出現しました。インドラ神が [わたしを] 試すために妃を [請うたので、] あげましたが、また差し戻していただきました。そのあとすぐに国に召喚され、息子の光線頂 ('Od zer tog) が国王になるなど、祝祭が起こりました。¹⁰

以上の引用箇所を参照の上、以下に示す試訳の『マニ・カンブン』における二本の「ヴェッサンタラジャータカ」類似本をダライ・ラマ五世のテキストと比較すると、登場人物の名前と場面説明が合致しているのが明瞭である。『マニ・カンブン』を含めて、ソンツェンガンポ王をめぐる王統史を叙述する典籍や平行句を持つ典籍は他にも存在する (Sørensen 1994)¹¹ が、ソンツェンガンポ王のジャータ

カを含む典籍は筆者の知識では『マニ・カンブン』以外の典籍に見受けられない。

ここでは教義上、中心的テーマは布施行である。ダライ・ラマ五世は自身を布施行に住する者として描いている。ただし、彼がこの物語の原点が「ヴェッサンタラジャータカ」にあることを知っていたかどうかは定かではない。『マニ・カンブン』における二つの類似本では、布施行はもとより、王子を取り巻く人々の家族愛や夫婦愛が随所に描かれている。苦楽を共にする決意には夫婦愛の強さが示されている。太子の父王の性格も優しく柔和であることがうかがえる。一方的に命令をくだして従わせるといったワンマンな君主ではなく、宝珠を与えることに加わった臣下たちをとがめることもない。

布施行については、その行為が人身に及ぶことで、金銀財宝よりも人身が尊いことが示されている。人身を含む布施への言及はパーリ語の『ヴェッサンタラジャータカ』に見られ、¹²『世自在太子本生譚』の中では二人の妃に「命を捨てても太子の布施を拒まない」¹³と言わせる。そのような言動は人身を軽んじるあまりの言動ではない。物語の終結部で大切な宝物を敵の手に渡したことで太子を追放したことを後悔せしめる様子が描かれているからである。我が子を布施するまでに及ぶ布施行の実践を目の当たりにさせ、金銀などの物質的な財宝よりも命の尊さを逆に知らしめる内容となっている。さらに、その後、チベット語の『ヴェッサンタラ・ジャータカ』の別の類似本である、『ディメ・クンデン』(Dri med kun ldan)¹⁴では、太子は自分の目をくりぬいて布施し、チベットのチュ (gchod) という身体布施を模擬した密教の実践者への暗示的描写がある。¹⁵

4. ソンツェンガンボ王自伝 (試訳)

前説

[シャーキャムニ仏以外の] 他の仏陀の教えの際に為された歴史は[以下です。] さて、ラサのチュルナン宮殿において、第七月の満月の日に、ソンツェンガンボ王が[王自身の] 子息、大臣、妃たちに取り囲まれながら、自生の聖なる大慈悲者(観音自在菩薩)に花をお供えしていたとき、[王が] 三回微笑みになったので、大臣たちが拝礼し、[大臣の中の] トンミサンボータ (Thon mi Sam bhoṭa)

が次のように訊ねた。「王よ、私たちは長らくお仕えしておりますが、このように微笑まれたのを見たことも聞いたこともございません。ソンツェンガンポ王ご自身は、過去、現在、未来仏に微笑まれたのですか。チベットの正法（仏教）の伝統を打ち立てられたことに微笑まれたのですか。インド（rgya gar）と中国から二人の王女を得られたことに微笑まれたのですか。神々と魔物を鎮圧し、寺をお建てになったことに微笑まれたのですか。四辺境の敵どもを制圧し、チベットに安寧をもたらされたことに微笑まれたのですか。それとも開拓してチベットを貧苦から解放したことに微笑まれたのですか。どうして微笑まれたのかお聞きしてもよろしいでしょうか」と問うと、ソンツェンガンポ王は「次のように」お答えになった。「私は過去仏にも微笑みませんでした。現存する諸仏にも微笑みませんでした。未来仏にも微笑みませんでした。チベットに仏教の正法の伝統を打ち立てたことにも微笑みませんでした。インドと中国から妃を迎えたことにも微笑みませんでした。チベットの神々と魔物を鎮圧し、寺を建てたことにも微笑みませんでした。貴い大地を祝福し、開拓し、チベットを貧苦から解放したことにも微笑みませんでした。わたしが微笑んだのは、幾劫にも渡る前世で「仏」法のために為した苦行の苦しみを思い出したので、今、希望と安堵の思いから微笑んだのです。よく聞いて、心に留めなさい。わたしが説明しましょう。

前生譚のはじまり

九十一劫の昔、光造慧頂仏仏が「法を」お説きになっていたとき、わたしはジャチェン（Rāhu, sgra gcan）という所で、父ジャヤンガ「旋律的な太鼓を有する者」（sGra dbyangs rnga）の五百人の妃のうちの最年少の妃無垢（Dri med, Vimala）の息子、世自在として再生しました。十六歳のときに、光造智慧頂仏の御前に行った折、日月光女という女性と、虚空光女と出会いました。二人はわたしの妃になることを望みました。わたし自身は布施をすることが好きでしたので、[二人に]「乞食女が現れたとき、わたしが妻子を敢えて布施として差し出したとします。布施しても、後悔に苦しみませんか」と言いました。すると、[妃たちが]「わたしたちを妃として受け入れてください。そのよう（苦しむよう）にはなりません」と主張しました。わたしは仏陀に青睡蓮と金貨のお供えをし、無上正

等覚へ菩提心を起こすことを発願しました。父からわたしの王国で灌頂（abhiṣekha, dbang bskur）を受けて、ジャチェン国の名声源（Grags pa'i 'byung gnas）[という名の]王と、有蓮華国（padma can）の無垢王（Dri ma med pa）の娘[たち、つまり]、日月光女と虚空光女に頼んで、それぞれに、銀貨百枚と金貨百枚を運んで、使者を送って、わたしの妻として招聘しました。日月光女に息子が一人生まれて、名を光明頂（'Od zer tog）と名付けました。

それから、わたしは布施に住し、お金に困っているたくさんの人々に、それぞれ欲しいものを何でもあげましたので、わたしの布施の名声は遍く広まりました。それから、辺境の近沙樹（Bye ma shing drung）国に有木座（Shing khri can）という名の悪い王がいました。ジャチェン国の敵であるその王は、「あの王が何でも望むものを与えるなら、あるだけの財宝全部をわたしが取れば、彼よりわたしが上になる」と考えて、三人のバラモンを派遣し、わたしのところにやって来て、「王よ！あなたの布施の名声は遍く伝わっています。わたしたちも困窮して物乞いに来ましたので、あなたの富をわたしたちにください。そうすれば、[あなたの]布施は完成するでしょう」と言って拝礼しました。もし与えなかったら、布施を完成できないので、宝石を取って、疑わずに布施したところ、父は危険を感じて、「早く去れ！」と仰言ったので、バラモンたちは吉祥を願い、足早に去り、王たるわたしに供物を捧げて敬意を表し、[わたしは]バラモンに褒美を与え、[バラモンは褒美の]宝石を崇めました。宝石を敵に与えたということを父は聞いて、「以前は宝石があったので、他より勝っていたのに、今では他より劣っている」と言って、悲しみにうちひしがれました。それから、みんなが話し合って、「今、尚、布施をするならこれらのまだある宝石もなくなってしまうので、この王が二十五歳になるまで、魔物が住み、カラスやラーフラのいる暗黒山に入れてしまおう」を主張しました。父はわたしに「あなたが不適切な布施をしたので、そこに行きなさい」と仰言いました。「昨日、虚空女に女の子が一人生まれたので、まだ一週間、布施をさせてください」と頼んだところ、許可されたので、たくさんの貧者に布施をしました。わたしが二人の妃に「わたしは父のお言葉通り、人気のない悪魔の国に行くので、ここで幸せに暮らさない」と言ったところ、二人の妃は「楽ならお供し、苦なら別れるというわけではありません」[と言いました]。その

とき、大臣たちは宝石と馬と象と食べ物と衣服をたくさん送って、「あなた方のような人に命じるなどできないはずなのですが、布施をあまりにもし過ぎたので、お父上の言葉を成就された後、またすぐに会いましょう」と言って、全員が泣きました。[わたしの] 母、無垢女 (Dri med ma) は、神々と龍神に奉納して、「わたしの息子が悪魔とカラスやラーフラのいる暗黒山に行って、危難なく、再び帰って来ますように」と祈願しました。その後で、王と二人の妃が馬にそれぞれ乗り、兄妹二人を膝に乗せ、少しばかりの品々を象に乗せて来たとき、街の全員が泣きました。夕方、或る山の洞窟に着いたとき、祈願して、また進んで行きました。そして三人のバラモンが拝礼し、その父と母の三人が三頭の馬を「わたしたちにください」と言うやいなや、三頭の馬を布施しました。それから、王子と二人の妃は息子と娘と一緒に象に乗って行きました。また、道中、乞食に出会ったところ、「象をください」言ったので、布施しました。また、道中で、五人の乞食に出会ったところ、「お前さん、五人の服と装飾をください」と言ったので、布施して後悔しませんでした。そのとき、二人の妃は兄妹の二人を担ぎました。王[であるわたし]は道を進んだところ、道中で七人の娘が敬意を表しました。さらに行くと、神々が天宮を作り出し、[わたしたちに] 捧げました。妃二人は「ここに住めばいいわ」と言いましたが、わたしは父のお言葉に従って進むため、「住まない」と言って、行きました。魔物の山に近づくと、大きな川がありました。「川よ、あなたはわたしたちに道を開け」というと、川が裂けて、向こう岸に行ったところ、また、以前のように[川が] 流れました。一人の老女と会って、その人に道を尋ねたところ、その者は「この下方に道はないが、あなたは仏陀の化身なので、どこに行こうが道がある」と言って去りました。そして、人気のない、カラスとラーフラの魔物の住む暗黒山に着きました。

その魔物山は頂上は雪山で白く、中腹は岩山で赤く、低層部は森で黒く、様々な鳥とラーフラで満たされているのが見られました。わたしの慈愛の力によって、その国に住む魔物とラクシャサと肉食動物たちは怒りの心がなくなり、[わたしたちを] 歓迎し、害することがなくなりました。湖と池とテンガ (lteng ga) と草と葉草が広がって、いろいろな樹々に果実が熟して頭を垂れました。その山にふたりの僧侶が住んでおり、[わたしたちに] 気づいて来ました。「どこに住めば瞑

想を増大できますか」と尋ねたところ、二人は「ここは人間が住む場所ではなく、魔物、ラークシャサ、悪者たちが住む場所です。けれども、あなたは菩薩なので、どこに住んでも大丈夫です。あなたの徳と結びつくなら久しくないうちに悟りを得るでしょう。あなたが悟ったとき、わたしたち二人も随伴の最初の弟子として再生します」と言いました。それから、快適な住居を探して、そこで、[わたしたち] 父母たちは草と葉でつくった小屋を造って、蓮根と果実などで生活しました。わたしは大乗仏教の意味に心を配って (manasikāra, yid la byed) 内で瞑想生活 (nang du yang dag 'jog) に住みました。二人の妃は父と息子 [と娘の] 三人の召使になり、兄妹二人は森で遊んで、楽しく過ごしました。そのとき、息子が鹿に乗って、落ちてできた傷を一匹の猿が見て、川岸に連れて行き、木の葉に呪文 (sngags) をかけて濡らしたのを見ました。わたしがちょっと目を離れたすきに、醜惡なバラモンがやって来ました。砂と木屑まみれの乞食でした。醜惡なバラモンの妻が [夫に] 言いました。「ジャチェン国の王様、世自在に兄妹二人を求めて来なさい！ さもなければ、わたしはあなたと夫婦になりません」と言ったので、[醜惡なバラモンは世自在に] 「あなたの息子と娘二人をわたしにくださるよう求めます」と言いました。布施しなければわたしの布施は未完になるので、疑いなく布施しました。バラモンが兄妹二人を連れて行ったのを妃二人が気づいて、森から素早くそこに行ったところ、屍体を担いだラークシャサ女に道を遮られて遠のいてしまいました。大地も激しく揺れました。それから、もとの住居に戻ったところ、息子と娘の二人はおりませんでした。王も何も言わずにたたずんでいました。兄妹がどこに行ったのか尋ねたので、「醜惡なバラモンにあげました」と言うと、悲しみに打ちひしがれて気を失ってしまいました。目覚めたとき、「あなた方二人は以前に立てた『妨害しない』という誓いを思い出さない」と言って、わたしは泣きました。妃二人も泣きました。また、その国に住んでいる全ての神々と龍神もまた嘆きました。同様に、十方の仏陀と菩薩すべても涙を雨のように落としたので、その国に大きな湖が一つできました。その湖の上に咲いた蓮の花のそれぞれに仏陀の化身が生まれて、大地が揺れ、虹の光がかかり、花の雨がふりそそぐなどの不思議な印がたくさん生じました。そのとき、二人の妃はわたしの布施に賛同して、諸仏に供物を捧げて祈願しました。また、神々の主、インドラ

神とヤクシャの理知成就（Grub pa'i blo gros）の二者がわたしを試すために、それぞれバラモンに変身して二人の妃を差し出すよう求めたので、わたしは疑いなく布施して後悔を感じなかったので、七歩歩いてまた再び、（二人の妃を）わたしに返しました。近沙樹国のバラモンは兄妹を連れてきて、バラモン女のところに來て、「素性がいいので、召使には適さないが、売って、使用人として使うことができる」と言って、バラモンは「兄妹を」ラーフ国に連れて行きました。「あなたはどのようにして「兄妹を」得たのか」と聞かれると、「王にいただきました」と言いました。「このようなものを敢えて与えるなら、宝石のようなものをなぜ与えないのか。わたしたちが王を追放したのは間違いでした」と言わしめました。それから、「兄妹は」祖父のそばに連れて來られて「祖父に」呼ばれたとき、膝に載るのを拒みました。息子は言いました。「わたしは素性が悪い使用人となったので、おじい様の膝に行くことはふさわしくありません」と。祖父が涙を流して、「バラモンに欲しいだけの財宝を与えます」と言ったとき、息子は言いました。「わたしは王の息子ですが、素性の悪い使用人になったので、価値は少ないです。銅貨千枚と牛二百頭を与えてください」と。その通り与えて、食べ物と飲み物は与えなかったので、息子は「食べ物と飲み物もあげてください」と言いました。[息子の] 祖父は「この者があなた方二人を使用人にしたので、与えません」と言いました。息子は「与えてください。この人は今まで仕えてきた主人のバラモンです」と言うと、祖父は息子の言葉を聞いて、バラモンに食べ物と飲み物を与えました。バラモンは傷心しましたが、怒りを持たず、共感して喜びました。それから、父「であるわたし」に使節を送って、そこ（森）にとどまることなくジャチェン国に急いで戻るよう命じました。使節は川を渡らず、私を念ずるや否や川を渡って、わたしの前に來ました。それから、わたしは妃と一緒に父の言葉通りに進みました。アスラたちが悲しんで、その地域も苦しむようになりました。また行くと、道中で、近沙樹国の王が「わたしを」招待して、宝石を供えて、「わたしに」許しを請い、臣下となると約束しました。ジャチェン国へ着くと、父母と會って、非常に嬉しく思いました。母の目に輝きが戻りました。従臣たちが供物の財宝全てを布施するために送って、すべての貧しい人々を満足させました。息子の光明頂に曼荼羅（Man da ra）王女を妃として迎えて王国で灌頂の儀式をし

ました。[娘の] 青蓮女 (Utpala ma) 王女は安楽造というバラモンの息子に送りました。そのとき、光造慧頂仏がわたしに予言しました。「あなたは、この次の来世で、ガルイエ (Gar yas) という場所で、踊自在 [仏] (Gar gyi dbang phyug) の教えの時代に、「知恵の莊嚴」(Shes rab brgyan) という名の天女として転生するでしょう」と仰いました。[以上が] 世自在王として再生したときの行いです。

5. 世自在王子本生譚 (試訳)

世自在王子 ('Lokeśvararājaputra, rgyal bu 'Jig rten dbang phyug) の本生譚でございます。オーン・マ・ニ・ペ・メ・フーン。大慈悲[観自在菩薩]様に拝礼いたします。大慈悲様の化身、護法王たる主君ソンツェンガンボ王は、木女兎年の第七月第八日、新年の饗宴の際、微笑まれたので、その地域を護っている大臣のガルトンツェン (mgGar stong btsan) と、翻訳経官のトンミサンボータ (lo tsā ba Thong mi Sambho ṭa) の二人が座席から立ち、敬意を表して、掌を合わせて拝み、身口意の三つで拝礼し、質問しました。「おお、大王よ！わたしは大臣として三十年ばかりの間、[王が] 微笑みになったのを見たことがございません。今、微笑みになった原因はなんですか。わたしたちにご説明になさってください」とご質問すると、王は[次のように] 仰いました。「わたしは数え切れないほどの転生を覚えており、991劫前に、光造慧頂仏の時代に、わたしは王として再生し、布施を行ったので、今、苦楽の業を思い出して、喜んでいるのです。その方法についてあなたに説明するので、よく心に留めなさい。話しましょう」と仰いました。

前生譚の始まり

以前、ジャチェン (Rāhu, sGra gcan) という国に尊父ジャヤンガという、思量できないほどの喜びを持つ王がおりました。妃は五百人いましたが、息子はおりませんでした。バラモンの娘に「メール山の神ナーガに供養するなら息子が授かるでしょう」と託宣が下りました。山の神に食物の供物をたくさん持って行き、すべてのナーガ神を供養したとき、最年少の妃、無垢 (Dri ma med pa) に息子

が生まれたと全員が聞いて喜びました。或るバラモンが「息子に」命名したとき、
「この王子は非常に幸運で、

良い相を備えており、お体が光輝いている。

吝嗇なく、大慈悲を持ち、

覚醒者として世間を導く。

偉大な力を備えており、財を有し、すべての者から敬われる」

「と言いました」 名前も世自在太子と名付けました。それから、誕生会が行われました。太子を保護する養育係が四人任命され、一人は遊戯をする養育係として任命され、一人は乳とヨーグルトを食べさせ、一人は障害からの護衛のための養育係として任命され、一人は膝に抱いて養育する係として任命されました。

それから、太子が成長して十六歳になったとき、工芸、話術、書き方、数学、音楽すべてを習いました。御父母は一人っ子ではないかのように忙しく「王子に手をかけて」おりました。

光造慧頂仏へ供養に行く道中での後の二人の妃との出会い

そこで、御父は太子のために美しく優雅な宮殿を建てて、太子を玉座につけようと考えたとき、太子は、

「善根を完成するまで

究境の空性を得ない」

とおっしゃいました。「[わたしは] 布施が好きです。視界に入る衆生がすべて安楽で幸せであってほしいので、布施をせず、愚かで無知蒙昧な者達は自分をだまして悪趣へ行くでしょう。布施をして、賢く智慧ある者達は覺者となる。善から善へ生まれて、布施を完成します」とおっしゃいました。太子が菩提樹のもとに「いらっしゃる」慧光造頂 (Ye shes 'od mdzad tog) を参拝しに行った道中で、太子が美しい娘二人に出会われたとき、二人は「太子よ、どこに行かれるのですか」と言いました。娘二人は太子に拝礼して「女性たちの」一人は七本のウドゥンヴァラの花を、[他の] 一人は五本差し上げて、「わたしたち二人が菩提を得るまで太子の妃でいられますように」と祈願しました。太子が「わたしは布施に住するので、あるだけの財を布施すると

き、あなたたち二人は貧しく苦を味わうことになるので、そんな祈願をしてはいけません」と言う、「わたしたち二人は布施を助けますので、御慈悲をください」と言いました。太子は「あなたたち二人も布施しますか」と言ったので、「命を捨てても太子の布施を阻ばないという誓いを破りません」と言ったので、[太子は]「妃にする」と言いました。太子は妃二人と一緒に慧光造頂仏のもとに行き、太子は金貨を九枚捧げました。娘一人はウドゥンバラの花を七本捧げ、一人は五本の蓮華を捧げて菩提心を起こしました。それから、自分の国へ戻る途中で、太子が「あなたたち二人の国はどこにありますか。父上はどなたですか。お名前は何ですか」と聞かれましたので、娘の一人は「わたしの国は名声（Grags pa）と申します。父王は名声源（Grags pa'i 'byung gnas）と申します。わたし自身は日月光女（Nyi zla sgron ma）と申します」と言いました。一人は「国[の名]は蓮華（Padmo）と申します。父王は無垢（Dri ma med pa）と申します。名前は虚空光女（Nam mkha'i sgron ma）と申します」と言いました。それから、それぞれの国へ帰って왔습니다。

娘二人との結婚

世自在太子の父の一千八の町には妃が五百人おりました。大臣は四千人おりました。六十の封建領土によって辺境地を治めておりました。馬と象が五千頭ありました。思量できないほどの宝石の倉庫に他を抜きん出た、聖なる如意宝珠がありました。王も他より偉大でした。そのとき、「妃二人を呼び戻すために使節を送る」と言って、百頭の馬に金貨百枚を乗せて、日月光女を召喚するために大臣を遣わしました。さらに、百頭の馬に銀貨百枚を乗せて、虚空光女を召喚するために使節を遣わしました。娘二人に良し悪し[の差]がなくても、[娘の父]王に権力差があったので、金銀の差をつけました。名声源王に金貨百枚を捧げ、ジャチェン国の王ジャヤンガジャ王の息子、世自在太子に妃をくださいとお願いをして贈り物を送ると、父[王]は娘に、「そなたは行くのか、行かないのか」と言ったので、[娘は]「行きます」と言いました。娘を金銀などで飾って、ノンパ重（重さの単位）の貴い象一頭分の宝石と、ノンパ重の貴重な象一頭分の衣類と、ノンパ

重の貴重な象一頭分のすぐに食べられる食料品、装飾品、遊戯と世話係の娘二人を伴って送りました。

また、大臣は馬百頭に銀貨百枚を〔乗せて〕大臣を無垢王に捧げて、ジャチェン国のジャヤンガジャの息子、世自在太子に王女を賜るようにとのお願いをしたので、王は娘に「そなたは行くのか行かないのか」と尋ねると「行きます」と言いました。無垢王は王女を様々な貴重な装飾品で飾り、金を背に乗せた象一頭、装飾品と世話係の娘二人を伴って送りました。それから、ジャチェンの町に娘二人を迎えて、王の妃として据えられました。太子も王国の摂政となり、父王は王国を譲ることについて太子が悲しんで泣いたので、王が「王国を譲るのが不快なのか、どうして泣いているのだ」と言ったとき、「わたしが父上にお尋ねすることをお許してください」と尋ねたので、「何でもほしいものをあげるので、泣くな」と言いました。太子は「この国には聾人と盲人と啞者とびっこを引いている者と病人と貧困で何も持っていない者がたくさんいるので、わたしは彼らに慈悲を起こしています。そのため、父上の財宝の倉庫をわたしにくださるようお願いいたします。本質のない (snying po med pa) 財に本質を探すべきです。わたしが布施を行い〔財を〕撒きます」と申しましたので、父の「あなたが欲しいものは何でも使いなさい」との言葉通りに、町の四方の門に布施の館を築き、大臣たちが財宝を入れて、全方位に呼びかけて、「世自在太子が布施をするので、何でもほしいものを取りなさい」と御布令を出しました。それから、布施に住して、どんな乞食者でも布施して、一切衆生に対して父母のように愛情を注ぎました。太子の名声によって、色界の神から大地にいる者まで太子の功德を宣言しました。そのとき、或る者は百パクツェ（距離の単位）からやって来ました。或る者は千パクツェの彼方からやって来ました。〔皆、〕乞うものを得ました。太子は嬉しくて、自分の家にあるものを他人に布施して喜びました。さらに、食物が欲しい者に食物を特に与え、衣類が欲しい者に衣類を特に与え、金銀が欲しい者に金銀を特に与え、宝石が欲しい者に宝石を特に与え、馬と象が欲しい者に馬と象を特に与えて、三年間、望むままに布施を施しました。一切〔衆生〕が享受しました。そのとき、日月光女妃が王子を生んで、誕生会が行われました。王子の名前も光線頂 ('od zer tog) と命名されました。

辺境国の王の企みと太子の追放

そのとき、近沙樹 (Bye ma shing drung) という辺境国に有木座王 (Shing khri can) という名の敵の悪王がいました。その王は太子の名声が全方位に遍くことに不快感を持ち、知恵のある大臣を組んで、「ジャチェン国の王にある、何でも望みを叶える如意宝珠を懇願する必要がある。彼は布施が好きだから、望むものは何でも布施するという誓いによって布施するだろう。宝珠を獲れば、我々が王となるのに十分だ」[と言いました]。大臣たちは「彼是我々を殺すだろう。懇願できません」と言いました。そこで、バラモン三人が「わたしたちが行くので、支度して贈り物をください」と言いました。王は支度品を渡して、財宝を渡し、「あなたに大きな報酬を与えるので、あなたたち三人は即座に行け」とおっしゃいました。それから、バラモン三人が国と谷をいくつも越え、ジャチェン国に入って王の門の近くにあるベルにもたれて座ったとき、或る大臣が、「あなたはどこから来ましたか。なにが欲しいですか」と言ったので、「わたしたちは近沙樹国から来ました。世自在太子に会いたいです」と言ったので、「わたしがお伝えしましょう」と言って、太子に「バラモン三人が面会したいと言っています」と告げました。太子が戻ってきて、父と息子に会っただけで喜んで、「どこから来ましたか。牛乳を飲みますか。わたしに欲しいものを言ってください」とおっしゃいました。バラモン三人は「わたしたちは近沙樹国から来た乞食です。太子に如意宝珠を請いにきました。それゆえ、究極の功德によって、あなたの布施は完成するでしょう」と[言いました]。[それを]聞いて、「それに匹敵するものはどこにもありません。ならば必ず与えましょう」と言ったとき、[同時に]太子は「驚きだ。これを布施すれば父上の命令を破るのでわたしは辺境に追放されるだろう。与えなければ、わたしの布施行は完成しないので、必ず与えよう」と考えて、「如意宝珠を絹織物で巻いて、宝石箱の中に入れて、勝旗の頂上に掛けて運んで来なさい」と言ったので、大臣一人が運んできて、太子は金の壺の水でバラモンの手を洗って、宝珠を与え、バラモンは太子に拝礼して祈願し去りました。太子はバラモンに「日が暮れないうちにすぐに行きなさい。父上が探せば、追って、取り返すかもしれません」と言いました。バラモン三人は国を何の咎も受けずに来て、[太子は]バラモンに思量できないほどの褒美を与えて、宝珠を権威づける仕草をしました。

辺境の王は財を持つことになりました。それから、四千人の大臣と六十の封建領主は「世自在太子が宝珠を与えた」と聞いて、慄いて気絶してしまいました。それから、全員が気絶から覚めて、会議を開いて、父王に告げたとき、父は王の座席から落ちて気絶してしまいました。それから、梅檀の冷たい水をかけられて、意識を取り戻し、「太子が欲しいものが何でも生じる宝珠を敵にあげたというのは本当なのか」と言うと、大臣たちは「本当です」と言いました。父王は泣いて五百人の王妃も泣きました。祖母が「泣いて何になるのか。王と大臣に相談しなさい」とおっしゃったので、大臣たちと会議をしたところ、最初に「太子にバラモンのことを」連絡した者の舌を切り、宝珠を取った者の腕を切り、バラモンに宝珠を」あげた者の頭を切断し、案内した者の目をくりぬくよう命じました。しかし、王はそうのように聞いたとき、不快になりました。「わたしの息子はこれ〔布施〕がよいことだと信じています。〔太子は〕菩薩の継承者です。太子を座から下ろす必要があるので、罪なき者を罰しません」と言いました。そこで、大臣たちは「宝珠があったので、他より勝っていました。宝蔵全部が空になり、王国は敵の勢力あるいは辺境から追われて全滅して制圧されるでしょう。だから、罰を与えてください」と主張しました。ある者は「王には息子が一人しかいないので、罰を与えれば、〔王の〕系統が途絶えてしまいます。宝珠は失われたので、取り戻せません。太子を王国から追放しないなら、残っている宝までもなくなって、貧しくなり、他の王がますます〔勢力を〕増していくでしょう。それゆえ、無人の悪魔の領域の、ジャロクジャチェン (bya rog sgra gcan, 「カラス (の頭をした) ラーフ (の)」) 暗黒山に二十五年間追放しましょう」と言うと、みんなが賛同したので、父は息子呼んで、「あなたが私の偉大な宝珠を敵にあげたことはあまりにも非道理な布施で、王国は敵に制圧されます。これより偉大な宝珠はこの世にありません。これは以前、阿弥陀仏 ('Od dpag med) が海の魔女の島で、青い蛇女を魔物から取り戻したとことの報酬としてくださったものです。今、あなたを無人の魔物の地である悪魔の暗黒山ジャロクジャチェンに二十五年追放するので、そこに行きなさい」と言いました。「父の言葉に背くことはできません。昨日、虚空光女妃に娘が生まれましたので、七日間布施をさせてください。それから行かせてください」と頼みました。「あなたは布施することはできません。たとえ娘が

生まれても行きなさい」と言いました。五百人の妃と大臣たちは「太子は国から二十五年間行くので、たったそれだけの期間〔なら〕留まらせてもいい」と主張しました。そこで、父も許可して、七日間布施して全ての貧者を呼ぶように告げました。それから、息子〔の太子〕は二人の妃に「わたしは二十五年、無人の土地悪魔の暗黒山ジャロクジャチェンに追放されたので参ります。あなた方二人はどう思いますか」と言うと、「わたしたち二人も太子と一緒に参ります」[と言いました。] 御父母は臣下を伴って、安楽で幸せであるよう祈願して、「行け」と言いました。そこで、息子は「その領域は山、狭谷、荒々しい土地、たくさんの荆棘、ライオン、トラなどのたくさんの肉食動物、蛇と悪い魔物は計り知れないほどいます。昼は暑く、夜は寒いです。雪と雨が多く、岩が多く、鳥が岩の割れ目を利用した避難所がありません。そのような場所に人間が入るので、あなたたち二人はほしい宝石をとって、父上たちの土地にお行きなさい。ここでは、衣服は軽くて柔らかいものを着ています。食べ物はとてもおいしいものを食べています。仕事は召使がします。悲しいときは踊りと音楽をします。テントで、カーテンで仕切り、絹と金欄緞子で過ごすことは非常に特別なことですが、その悪魔の森では敷物は草しかありません。着物は草の葉を着ます。食べ物は果物以外にありません。喉が渴けば、水を飲むしかありません。悲しみの友となるべきものは肉食獣しかおりません。住まいはどうなるのか、壊れやすいもの以外にはないので、そこで恐ろしい思いをするでしょう。だから、ここに留まりなさい」とおっしゃいました。妃二人は「ここには太子がいないので、衣服や食べ物や召使や歌や踊りは何になるますか。太子の家系は息子が保ちます。家事は妻がします。楽しければお伴し、悲しければ別れるなど誰ができますか。わたしは太子と別れるなんてできません。太子が行く先で布施をするお伴をします。太子の長い道程で乞食が現れれば私たちの命を落とすことさえ疑いを作りませんから、布施をしてください」と言いました。太子は「敵が布施を頼めば与えないということはないので、あなた方妻子を請われても布施します」と言ったので、二人の妃は「わたしたちが請われても布施すれば幸いです。わたしたちは善行の妨げをしませんので、絶対に連れて行ってください」と頼みました。太子は「人身を得ることはそのようなことなのだ知る必要があります。全ての輪廻の苦から解脱すべきであるとき、

善を行う必要があります。一切衆生は優しい父母であるので、善を行う必要があります。わたしの善行の妨げをするな」と言って、妃二人と一緒に母上に別れを告げ、去りました。「お母上、二十五年間、幸せでお過ごしになってください。わたしはお父上によって悪魔と暗黒森ジャロクジャチェンニに追放されました」と言いました。

父母の嘆き

父上は大臣たちに「太子が行くと言うので、家系は誰が継ぐのか。臣民の助けは誰がするのか。計り知れぬほど貴重な太子です。財宝を失い、太子を追放して何になるのか。太子と財宝の二つともなくしてしまうのか」と言ったので、大臣たちは「左様です。布施が度が過ぎたので、そのぐらいの罰で断じなければ、王国は崩壊してしまいます」と言ったので、御母は次のように言いました。「王の五百人の妃に息子がおりませんでした。神に祈って生まれたこの息子を追放するとき、善行を為すが、喜ばれずに悪行を為したので〔皆は〕悪趣に陥るのを喜んでいます。非常に小さな息子の苦悩をつくり、王国から追放しようと望んでいます。こんなことができる〔とは〕。追放しないで。どこかで死ぬでしょう」と言って、体を地面に投げ出して泣き、太子の手を取って泣きました。太子は母上に「お父様のお言葉を破ることはできないので、泣かないでください。二十五年後にお母上とお会います」と言いました。太子は「泣かないでください。息子のためにも涙を流さないでください」〔と言いました。〕妃二人も泣きました。大臣たちも泣きました。そのとき、母上は熱意を起こして、「息子が道に行くのに泣くのはよくない」と考えて、息子の涙を拭いて、国の神々を祀って、「わたしのこの息子が再び帰ってきますように。王国が守られますように。息子が追放されている間、幸せで安楽でいられますように」と祈願して見送りました。

太子の出立

それから、太子が乗る馬と、妃二人の各々に馬、お弁当の荷を一つと、息子と娘の二人を母親の膝に乗せて来たとき、全ての者達が涙を流しました。そして、五百人の妃はそれぞれ、真珠の飾りを捧げました。六十の封建諸侯たちが金貨を

各々捧げました。臣民たちは色々な宝石を捧げました。一切方位への布施をして、全ての貧困者に投げ与えました。六十の封建諸侯など全ての者たちが享受しました。太子は布施波羅蜜を完成して、十方に五体投地し、次のように祈願しました。

「恩恵の深い父上と母上のお二方と離れたとき、

一切衆生が父母となりますように。

名の知られた国と離れたとき、

一切が友となりますように。

飲食の享受と離れたとき、

五つの望みの品々の宝物が備わりますように。

人気のない悪魔の暗い場所で彷徨うとき、

勝者たちが常に守ってくださいますように。

肉食獣や鹿が鳴き声を上げるとき、

仏法の声に変わりますように。

恐ろしく、不安な場所にいるときに、

菩薩が守ってくれますように。

胴島の魔女¹⁶ (tāmardvīpa, zangs gling mo) の住処でさまよったとき、

魔女たちさえ助けとなってくれますように」

と祈願しました。全員が涙し、七日間、太子に付き添いました。太子も「皆の者、帰りなさい」と強く言ったので、皆が転がりながら声をからして泣きました。顔を腫れ上がらせて大臣たちは「王たる国主が辺境に追放されるのはよくないが、よくない布施をしたので、断じないなら、王国が潰れてしまうので、二十五年過ぎれば、その後で、帰って来てください。王座を取る必要があります」と言いました。皆泣いたので、妃二人も泣きました。太子は「あなた方二人も彼女（太子の母）と一緒に帰りなさい」仰ったので、涙を流して彼女は涙で返答しました。「太子を捨てて戻るなんて誰ができますか。わたしたちは行きます」と言って、非常に喜んで行きました。

道中での布施

「一行が」 疲れて休息したとき、貧しいバラモン三人が来て拝礼して、「世間で

太子のこのような布施は誰にもできません。わたしたち三人も貧しさによって困窮し、太子に請うために来ましたので、馬三頭をください」と頼みました。太子は「いいですよ」とおっしゃいました。食物を供えて馬三頭を布施しました。それから、象に父母の三人が乗って、行きました。するとまた、道中で貧者一人と出会いました。その者が「私に布施してください」と言いました。「布施するもの自体はないが、何がほしいか」と言いますと、「象をください」と言いました。太子は「いいですよ」とおっしゃって、装飾が施された象を布施しました。御父母三人が徒歩で行くと、五人が現れて、太子に「ください」と言いました。「何もないが、何がほしいか」と聞くと、「あなたの衣服を五着ください」と言いました。太子が「そのように」と言うと、五着の五人家族の高価な衣装を布施しました。そのように、衣料品を与えて、何もなくなりましたが、後悔しませんでした。それどころか、幸せでございました。妃二人は息子と娘二人を担ぎ、太子によって導かれながら進みましたが、疲れて、梅檀の木陰で休息したところ、妃二人が食料すら欠いていたため、「まさにここに留まりましょう」と言われたとき、「父上の言葉を破ることになるのでここに残りません」とおっしゃって、進みました。

神々による賞賛

それから、道中、七人の娘が美味な飲食物を差し出して、太子を賞賛しました。

欲望、怒り、蒙昧がなく、

衆生たちに慈愛の心を持つ

あなたのような者はこの世にいません。

俗世を離れた隠遁の園で

すべての神々によって敬われています。

と言ったので、妃二人は「悪魔の暗黒山ジャロクジャチェンにはどのくらいありますか」と聞くと、「百ヨージャナ (yojana) あります」と言って、姿を消しました。それから、道中、三十三天がその隠遁処に美しい町を幻視させて敬いました。「ここにとどまるのはよくないですか」と言われたとき、「父上のお言葉から外れるので、とどまりません」とおっしゃって、進みました。暗黒山に近づいたとき、大きな川が現れました。太子は祈願して、「偉大な川よ！汝は私たち、時機が悪い

者たちに道を開いてください」と言ったとき、その川が上下に割れて、現れた道を進みました。川が一つになったとき、蟻を害することを恐れて、「川よ！汝は以前のように流れよ」とおっしゃると、また前のように流れました。

暗黒山の様相

それから、人気のない悪魔の領域に着いたとき、一人の老婆と遭遇し、彼女に「道を教えてください。住処を貸してください」と言いました。老婆は「汝、ブツダの化身はどこに住んでも良い。でなければ、この下に道はない。悪魔の場所である。上に戻りなさい」と言いました。それから、太子が上下を見たとき、上方は白い山、下方は黒い山、中間の岩山は赤く、端は大きく、森は深く、様々な鳥が鳴き声をあげていました。小川、池、小さな湖、泉、水鳥、ガチョウ、ナイチンゲール、クジャク、ガルーダ (shang shang)、オウム、禿鷹、カラス、フクロウ、リス、リ・ケク (¹⁷*ri skag*)、カッコー、カラヴィンカ (*kalavinka*) さらにまた種々の鳥が美しい声で鳴いていました。鹿、アンテロープ、野生の羊、バーラル、犀、豚、虎、レオパルド、ハイエナ、狐、ツァツイ (*tsha byi*)、ギャ (¹⁸*rgya*)、ジャッカル、さらにまた、色々な生類 (*rgyu ba*「動き回るもの」の意。) も、太子を害しませんでした。森は空に触れるほど高くにありました。

暗黒山で二人の僧侶と出会う

太子は「この場所はすべて、美味しい果物を食べて瞑想するのに適しています」とおっしゃいました。二人の妃が「そうでしょうか。確かじゃありません」と言いました。山に着くと、様々な鳥と鹿など、肉食獣たちが挨拶しました。山の神々も宝石の雨を降らしました。如意樹も拝礼しました。そこに、その山で瞑想している二人の僧が[太子のことを]聞いて、目の前に現れました。太子は拝礼し、「この山のどこに住めば、バナナで暮らしていけますか」と尋ねたので、「この山のどこに住んでも、大きな崖と溪谷があります。危険な肉食動物がたくさんいます。魔物とラクシャサの国です。ひどい雪と雨の中で凍えるので、あなたは定住できない可能性が高い。あなた方が仏法を聞くなら、わたしが説示しましょう」と言いました。[太子は]「わたしは二十五年間住むので、今、仏法をお聞きしま

す」[と言いました。]二人の僧に「ここで瞑想してどのくらい経ちましたか」と言うと、「百年年経ちました」と答えました。太子は「ラーフ国の太子世自在について聞いたことはありますか」と言いました。「もちろん、聞きました。見ました」と言いました。「それは、わたしです」と言いました。二人の僧侶は「太子よ、何が欲しいですか」と言いました。太子は「大乘の法が欲しいです」と言いました。「太子が功德に結ばれるなら程なく大乘の道を得るでしょう。太子が覚者となられたときに私たち二人は最初の弟子として生まれますように。そのブッダを尊べますように」と祈願しました。太子は「あなた方二人の名前は何ですか」と尋ねました。「わたしはシェラブ・ウ（慧光）、彼は化身ウ（光）と申します。太子よ。あなたはこの地で覚者となるでしょう。たくさんの仏陀と会って、予言をするでしょう」と言いました。そこで、二人の僧侶は太子の住居を示しました。高い山にある清浄な土地で、後ろに太陽が沈み、前に太陽が昇り、南に面しており、果物がたくさんあり、おいしい水、いい声で鳴くたくさんの鳥がいる場所に太子の小屋をそれぞれ作って、二人の僧侶は「太子よ、幸せに住まいなさい。過去の聖なる阿羅漢たちもこのようにして[自己と他者のための]二つの利益を成就しました」と言って、去りました。

暗黒山の変貌

それから、その翌朝、その場所で、水のない土地に水が湧き、実らぬ木に葉が生え、花が咲きました。猿が果実を食べましたが尽きませんでした。肉食獣が鹿の肉を食べたが尽きませんでした。野獣たちが下方の根を食べたが樹木の実はずべて成長が良くて美味しい味がしました。鳥たちが王の土地に留まり、美しい声で鳴きました。虎とレオパルドも盟友となり、慈悲の仲間となりました。それから、太子は九年間、父親として活動しました。娘は良家の衣装を着て母の手伝いをしました。妃二人も果物を探して父と息子三人を育てました。太子は大乘仏教の教えを修習しました。息子と娘の二人はそれぞれ鳥と遊びました。時々肉食獣とも戯れました。その間、日を過ごして、遊びました。そのとき、息子を太子が鹿に乗せたとき、鹿が岩塊からジャンプしたので息子の頭が割れて血が大量に出ました。妹は父母を呼んで泣きました。梅檀の木の幹にいた猿が走って、息子を

川土手に連れて、血を洗い流し、ジャコウジカの一枚の葉に呪文をかけて帰ったのを王は遠くから見ていましたが、動揺していたせいで、バラモンが現れたのを見ませんでした。

金沙国のバラモンへの二人の子供の布施

それから、[バラモンが木の] 根のもとに現れました。「どこから来ましたか。牛乳はいかがですか」¹⁹と言いました。「金沙という国から来ました。齢五十にして美しいバラモンの娘を妻に娶いました。わたしは驚くわけもなく老けています。妻は若くて美しいので、わたしを妻は嫌いで、わたしが死ぬよう願っています。皆も、「このような醜い老人に美しい娘がいるなんて」と言って煽り立てるので、わたしは幸せではありません。[妻が]「手伝いの者を探して来なさい！世自在太子は欲しいものをなんでも与えます。彼の息子と娘の二人をもらって来なさい！使用人を見つけて来ないなら、一緒に住みません」[と言います]」と言って、太子に息子と娘を布施するよう言いました。太子が「どうやって大河をわたったのか」と尋ねたので、「太子を心に念じて、河を渡りました。魔物とラクシャサと肉食獣による危害も生じませんでした」と言った。そこで、太子は食物を持ってきた息子と娘の二人を疑念なく与えました。「あなたは疑念なくお行きなさい。母親が来れば与えないかもしれない」と言ったので、そこで、バラモンが兄と妹二人を連れて去ったとき、西の木に兄と妹をくくりつけておいたので、兄と妹二人は泣いて「お母さん」と呼んだので、鳥と肉食獣と鹿などの山の生類たちが体を地面に投げ出して泣きました。兄と妹二人は山の精霊たちに「わたしたちのお母さんをお呼びください」と言って泣きました。二人の母親は心で感じて、不安になり谷が空虚になったと思い、目から涙を落としました。日月光女が虚空光女に「兄妹二人に何か間違いが起こったのか、不安です。涙も流れます。谷も空っぽになった気がします」と言うと、虚空光女も「わたしもその通りに思います。果物を取っているわけではありません。帰りましょう」と言って帰ったとき、道中で屍体を担いだラクシャシーが道を塞いで、通さなかったのが、ちょっと時間がかかりました。そのとき、大地が揺れ、太陽と天空は虹で満たされ、花の雨が降るなどの兆しが起こりました。そこで、二人の妃はそのラクシャシーに、

「あなたはラークシャシーの女王です。

わたしたちは人間の女王です。

二人の子供は小さいです。

今、ごはんを食べていないので、

泣いているのかわからず、どうすればいいですか」

と言いました。バラモンは遙か遠くまで行ってしまっていると知って、ラークシャシーは〔妃たちを〕送りました。以前に子供二人〔と〕道で出会っていた土地に〔子供たちは〕現れませんでした。鳥と肉食獣と鹿たちも泣いていました。彼ら二人も遊んでいませんでした。池の水も枯れました。花も枯れ果てました。王も恐ろしい形相になりました。「太子よ、兄妹はどこに行ったのですか。人に布施していませんか」と〔妃たちが〕言ったので、太子は答えることができませんでした。顔は暗くなって、〔妃たちは〕「以前、わたしたち二人が果物を採取しに行ったとき、以前に会いに来たときは衣服に塵があっても取り払いましたが、今、この場所は空虚になって、鳥や肉食獣や鹿たちも体を大地に投げ打って泣いています。今、兄妹二人が逆境に行ってしまったのは確かです」と言って、気絶してしまいました。それから、王は栴檀の水を〔妃二人に〕吹き付けて〔妃たちは〕回復しました。王は「あなた方二人はお聞きなさい。私が光造慧頂仏に供物を差し上げるために行ったとき、道中であなた方に出会って、あなた方二人がわたしの妻になると言ったとき、わたしは『そんなことをするな。わたしは布施をするので、あなた方二人は他所へ行きなさい』と言いました。そのとき、あなた方二人はわたしに『布施して死んでも布施の妨げはしません』と言いました。仏陀にわたしたち三人が捧げ物をして誓いを立てたことを思い出しましたか。わたしは父母二人を除いて、自分自信の体も捨てるので、布施を邪魔しないという誓いを思い出しませんか」と言いました。「あなた方二人はわたしの妃としてそれだけで喜ぶべきです。わたしが子供たち兄妹を布施することについては、わたしの布施の妨げをして怖がっています。父上のお言葉を破らず、母上のお言葉を破って、人気のない悪魔の領域に来て、あなた方二人はわたしを燃やすのですか。わたしに愛情がないのですか。わたしは布施に住して何が欲されても布施するのです」と言って、泣きました。彼らの涙が雨として降り注いだので、その大きな地域が湖とな

りました。そこで妃二人は気を取り直して、太子の涙を拭って、太子の心を癒して、布施に共感しました。

暗黒山の再変化

それから、七日後に、一茎の蓮が生まれました。その幹は金からでき、葉はトルコ石からでき、根は法螺貝からできていました。それに千の花が生じました。一つ一つの花に仏陀が現れ、千の仏陀が生まれました。かれらを太子と妃の三人は拝みまし。王は〔次のように〕賛辞を述べました。

「千手は千の転輪聖王、
千眼はよい劫の千の仏陀、
導く〔必要がある〕者がいるところではどこでもその者に説示する、
尊き観自在〔菩薩〕に敬礼します」。

さらに、神の国の宝石と、人間の国の宝石と、仏陀の眼で〔だけ〕見られる世間にある宝石と、宝石の山と木立と八つの支流を持つ川と海と衣服と装飾品すべてと、財すべてを頭上に掲げて〔次のように〕祈願しました。「わたしの説示者が千仏の教えと同等でありますように。千仏の教えとして説かれた一切の法がわたしの教えとして広まりますように。三劫の衆生がわたしの教えで解脱できますように。輪廻を揺るがす教えが確立されますように」と言ったとき、大地が揺れ、虹がかかり、花の雨が降り、音楽の音が鳴り、一茎の蓮に音が生じました。仏陀の涙が甘露の雨として降り注いだので、

清く、冷たく、汚れない湖
龍王の聖域、水中の城、
驚くべき、素晴らしい蓮、生みの母、
蓮から生じた、変化身の千仏
阿弥陀〔仏〕にお供する千仏が
虚空における黄金の蓮に現れました。
仏の教えの音が十方に響きわたりました。
六字真言が六道〔の衆生たち〕を導きました。
空に三つの太陽が現れました。

虚空に花の雨が降りました。
空にお香が雲のように積み重なり
十方すべてが灯火の輪で美しい。
甘露の水が海に注ぎ
天蓋と幟、旗、音楽の雲
衣服、装飾品、食物、財をもって、
神々すべてが供養しました。
太子は今日、予言された菩提心を起こしました。

妃二人の布施

それから、インドラ神とヤクシャのペルバルロジュ（dPal 'bar blo gros, 「威光燃理知」）が驚いて、バラモン二人に変身して、太子の近くに赴き、「わたしたち二人はお願いにあがりました」と言いました。太子は「何を望みますか。わたしにあるものは何でもあげましょう」と言われました。「では、妃二人をください」と言いました。太子は「いいです」と言って、妃二人をバラモンに喜んで布施しました。妃二人は「太子の世話を誰がするのですか」と言いました。「あなた方二人をあげなかったら布施は完成しません。行って、バラモンの世話をしなさい」と言って、バラモンの手に水を注いで洗い、妃二人をバラモン二人に差し出しました。そこで、バラモンは太子が後悔しないと判断して、バラモン二人は妃二人がそれぞれ七歩ずつ連れて、また引き返して太子に「妃二人を」差し出しました。太子は「さて、どうして欲しないのですか。

〔妃たちの〕家系は王の娘です。
美しくて魅力的で女神のようです。
早寝早起きをします。
食物を片付け、食べ物と飲み物は芳しい。
怠りなく非常に勤勉で、
寡黙で、言葉は敬意に満ちています。
解脱の道の法を導きます。
一切の功德を完成した二人の女性を

連れて行くなら、わたしは嬉しい」

とおっしゃいました。そこで、彼ら二人が言いました。「わたしたち二人はバラモンではありません。インドラ神とヤクシャのロジュペルバル（ママ）です。太子に後悔がないかどうか試してみたのです」と。自分自身のきれいな身体を示して、「太子仏陀の僕としてわたしたちが生まれ、宝石の蔵から衆生の利益を為しますように」と言いました。そこで、妃二人も拝礼して祈願しました。「一つには、わたしの息子連れしたバラモンがわたしたちの国に行って、祖父が兄妹二人を買って取り戻しますように。二つ目は、わたしたちの子供二人が空腹と喉の渇きの苦しみを味わいませんように。三つ目は、兄妹二人と早く会えますように。太子が一切衆生を生・老・病・死の苦から解き放ちますように。あなた様の広大な祈願が成就されますように」と言ったので、インドラ神は「あなたが最高処に再生することと、太陽と月と同じ寿命と世間の王としての再生はわたしは与えることはできませんが、以前よりも多い財を持って布施し、国で父母と子息とすぐに会うことを達成することを授けることはできますので、子供二人については心配しないでください。わたしがおじいさまのところへ行かせます」と言って、見えなくなりました。金沙国にバラモンが子息の兄妹連れで行ったとき、[バラモンの] 妻が訴えて言いました。「これら二人の子供たちは太子の子です。苦を経験したことがなく、このような傷や膿や血が出ているのは恥ではありませんか。太子が下僕となる例はありますか。これら二人を売りなさい。わたしたち自身で使えばいい。連れていきなさい」と言いました。

ジャチェン国での再会

バラモンが妻の指示に従い、[兄妹たちを] 連れて行ったとき、インドラ神がバラモンに「これらの子息二人をジャチェン国に連れて行って、売りなさい」と言った。「子供の毛穴に金銀貨を千個数えなさい」と言いました。バラモンはジャチェン国へ行きました。国の者たちは太子の子供だと分かって、心の底から泣きました。太子に驚愕して、「このような布施まで敢えてするなら宝石をなぜ与えないのか。わたしたちがこのような王を追放したのは間違っていました。今、召喚する必要があります」と言いました。ある大臣が「どこから来ましたか」と尋ねると、

バラモンは「売るのに何が必要ですか」と言いました。[大臣は]「わたしたちの国に現れたので質問します」と言いました。[バラモンは]「太子の二人の兄妹をわたしは王にもらいました」[と言いました]。国の者たちは「太子の二人の兄妹は捕まえられました!」と言いました。「判断が討議されるべきだ。太子が布施して取り返すことができないものを祖父が奪還するべきだ」と言いました。他の者は「その通りだ」と言いました。そのとき、王に子息二人が近づいて、「買いますか」と言いました。王は「連れてきなさい」と言って、バラモンと子息二人が宮殿に来て、王と妃二人[とも] 嗚咽して泣きました。それから、王は「兄妹をどのように得たのか」と[バラモンに] 言いました。[バラモンは]「太子にもらいました」と言いました。王は[孫たちを] 膝に取ろうと思って、[孫たちを] 呼びましたが、[孫たちは] 来ることができませんでした。王は[太子の] 息子に「いくらぐらい欲しいのか」と言ったとき、バラモンが答えることができずにいたので、息子が「わたしは二千銀貨、象二百頭、妹は二千金貨と乳牛二百頭になります」と言ったので、王は「世間では高価な宝石としての宝石がありますが、息子は小さな宝石です」と言いました。息子は「王は宮殿、財宝の蔵、食物、高価な衣装、臣民がありますが、太子を追放しました。わたしは召使として布施されましたので、わたしの値段は低いです。妹は臣民の妻に与えられたので、妹の価値は高いです」と言いました。王はそれを聞いて泣いて言いました。「あなたがわたしの膝に来ないのは嘆かわしいことです。わたしを好きではないのですか。バラモンを恐れているのですか」とお話しになったので、息子は「わたしは王が好きではないとかバラモンを恐れているというのではありません。わたしは王の孫ですが、人間の召使になったので、膝に載れません。奴隷が王の膝になるのは理に適っていません」と言いました。また王は泣いて、涙を流して、バラモンに代金を払い、子供二人をきれいにし、息子を膝に載せました。お手を二人の子供の頭に置き、「あなたは山にいたときに何を食べていましたか。何を飲んでいましたか。何を着ていましたか。何に座っていましたか。誰と遊んでいましたか」と尋ねたので、兄妹二人は「食べ物果物を食べました。飲料は水を飲みました。衣服は木の葉を着ました。座は草に座りました。遊び友達は肉食動物でした。怖くありませんでした」と言ったので、王は泣きました。孫息子が「このバラモンは

お腹を空かせています。何も食べておりません」と言いました。「あなた様、彼は喉が渴いていて、目が据わっていないので、彼に食べ物を与えてくださいませんか」と言ったので、王は「怒りが無いとは非常に驚きだ」と言いました。息子は「わたしの父上は息子と妻まで布施しました。あなた様、王が一人の食事を惜しむのは何という驚きでしょう」と言いました。「あなたは何と正しいのだ」と言って、食べ物を差し出したので、バラモンは喜びました。その貧しいバラモンは裕福になりました。

太子の帰還

それから、王は追放された太子を〔国に〕呼ぶために使者を送って、食料品をもたせました。大臣が大河を渡れずにいると、太子が作意して (yid la byas)、川が割れて渡れるようになりました。〔大臣は〕太子に拝礼して、父王が招待していると告げました。太子は「わたしは二十五年経たずには帰れません。来年、帰ります」と言って、使節を国に帰らせました。使節は父王に太子が来年帰ると言ったと告げました。再び父王は大臣に手紙をもたせて、「息子よ、あなたは布施が好きですので、あなたは以前と同様に布施に住しています。二十五年の誓いもここに来るやいなや消えてしまいます。さあ、怒らないで来てください」と〔手紙に〕したためられました。再び、大臣が王の手紙を渡したので、太子は承認しました。一切の方位に拝礼して、一切の神々に嘆願しました。「行け！」と言われて、行きました。そのとき、すべての鳥と肉食獣と鹿が泣きました。すべての泉が渇れ、すべての花がしほみ、すべての実が乾きました。父母三人に道中で辺境の沙木国の王が挨拶をし、宝石を捧げ、金銀の貨幣をたくさんお供えしました。大臣たちも様々な宝石を差し出しました。「太子が暗黒山に追放されたのはわたしのせいだと告白します」と言って、全員が告白しました。それから、「国の者たちと近〔沙樹〕国はあなたが覚者となるとき、わたしたちが従者として再生しますように」と祈願しました。太子は「ひとに美味しい食べ物を与えて〔そのひとが〕食べた後でそれを返してと言っても返って来ないのと同様に、以前にわたしが布施しても〔返して〕もらいませぬので、あなたが持っていなさい」と仰せになったので、近沙樹国の王も非常に喜んで〔それでも尚〕宝石を差し出しました。それから、

「あなたの臣下になります」と言いました。それから、太子と辺境の王二人は互いに慈しみあい、親しくなりました。太子が三日後に国に戻ると聞いて、国の者たちは非常に喜んで、全土に梅檀の水をふりかけ、花と香と旗と幟と金欄の天蓋で飾りました。国の全道路が掃き清められ、お供え物が配置されました。色々な音楽が王に捧げられました。国民は大いに祝辞を述べました。太子が宮殿に到着し、父母二人に拝礼し、父母が元気かと尋ねたとき、母は「誰ですか」と言いました。太子が「わたしです」と言うと、太子の手を取って、喜びました。父は宝石の蔵と財宝すべてを太子に譲渡しました。太子はそれからも布施を望むまに以前よりもっと行いました。息子、光線頂に有頂天王（rgyal po dga' ba'i tog）の娘、曼荼羅を「嫁として」取り、王座につけました。娘の青睡蓮女（utpala ma）はバラモン、楽造（bde byed）の息子たちの中で最上の者に嫁がせました。王が法性の意味を修習したとき、そこで、太子は覚者（mngon par rdzogs par sangs rgyas）となり、名前も、如来阿羅漢仏陀遍威光積（Kun nas dpal brtsegs）王となった。彼の世界に住する者たちすべてを果（'bras bu）に配し、預流果、一來果、不還果、阿羅漢果、縁覚と「なり」、あるものは菩提心（byang chub tu sems bskyed）を起こしました。能力と門（sgo）の最も劣等な者たちも転輪聖王か神と人間に生まれて、大乘の法（theg pa chen po'i chos）に入りました。

人物の特定

そのとき、父王「ジャヤン」ガジャは、現在のナリソンツェン（gNamri srong btsan²⁰）です。世自在太子はわたしです。母上、無垢（Dri ma med pa）は、このパドマツェサジサトウカルマ（Padma tshe yongs bza' 'bri za thod dkar ma）です。名声源王（rgyal po grags pa'i 'byung gnas）はこのネパール王バハ（Bha ha）です。当時の日月光女は現在のネパール皇女ティツン（Khri btsun）です。無垢王は中国の太宗です。虚空光女は現在の中国の公女（Kong jo）です。化身の僧侶光明（'od）はトンミサンボータ（thon mi sambho ʼta）です。僧侶慧光（shes rab 'od）はマンジュシュリー（Mañjuśrī）です。インドラ神は護国のガルトンツェンユルスン（mGar stong btsan yul bsrungs）です。妃二人の行く手を遮ったラークシャシー（srin mo）はシュリー・バジュラパーニ（dpal phyag na rdo rje）で

す。五世代後に私はパドマサンババ (padma 'byung gnas) として転生します。

略号・引用文献

明澄鑑 = “Khrungs rabs kyi zhing bkod 'bri tshul gyi rtogs brjod kha byang dang bcas pa gsal ba'i me long.” In *rTsom yig gser gyi sbram* bu. Zi ling: mTso sngon rigs dpe skrun khang. 1988-1989.

MKB=*Maṇi bka' 'bum: A Collection of Rediscovered Teachings Focussing upon the Tutelary Deity Avalokiteśvara* (Mahākāruṇika). Reproduced from a print from the no longer extant spuṅs-thaṅs (Punakha) blocks by Trayangs and Jamyang Samten, vols. E and Waṃ, 1975.

Vessantara Jātaka= *The Jātaka, together with its commentary being tales of the anterior births of Gotama Buddha*. Edited by V. Fausböll. London: Kegan Paul Trench Trübner & Co.Ltd. 1896.

岩本裕『佛教説話の伝承と信仰』佛教説話研究 第3巻、開明書院、1978年、136頁、147-149頁。
槇殿伴子 a 「『マニ・カンブン』の諸版について」仏教思想学会編『佛教學』59号、山喜房仏書林、2018年、53-80頁。

槇殿伴子 b 「チベット埋蔵經典『マニ・カンブン』における初期仏教についての記述——チベットにおける「ヴェッサンタラジャータカ」の伝播と変容——パーリ学仏教文化学会編『パーリ学仏教文化学』32号、2018年、67-90頁。

Bacot, M. Jacques. “Drimedkundan. Une Version tibétaine dialoguée du Vessantara Jātaka.” *Journal Asiatique*. Septembre-Octobre, 1914. pp. 222-305.

Ehrhardt, Franz-karl. 2013, “The Royal Print of the *Maṇi bka' 'bum*: Its Catalogue and Colophon”. In Franz-karl Ehrhardt and Petra Maurer (eds.), *Nepalica-Tibetica: Festgabe for Christoph Cüppers*. Bandl, pp143-172. Andia: International Institute for Tibetan and Buddhist Studies GmbH

Kapstein, Matthew. “Remarks on the *Maṇi bka' 'bum* and the Cult of Avalokiteśvara in Tibet.” In *Tibetan Buddhism: Reason and Revelation*, ed. by Steven D. Goodman and Ronald M. Davidson. New York, SUNY, 1992.

Lienhardt, Siegfried. *Die Abenteuer des Kaufmanns Siṃhala*. Berlin: Einer nepalische Bilderrolle aus der Sammlung des Museums für Indische Kunst Berlin, 1985.

Macdonald, Ariane. *Annuaire 1968-1969. École pratique des Hautes Études IV^e Section. Sciences Historiques et Philologiques*.

Makidono, Tomoko. “Vestiges of Religious Interaction Embedded in the *Maṇi bka' 'bum*: The Origins and the Development of the Cult of the Bodhisattva Avalokiteśvara.” In *The Indian International Journal of Buddhist Studies*, vol.15, 2014, pp. 135-198.

Sørensen, Per. K. (trans.), *Tibetan Buddhist Historiography. The Mirror Illuminating the Royal Genealogies: An Annotated Translation of the XIVth Century Tibetan Chronicle: rGyal-rabs gsal-ba'i me-long*. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag, 1994.

Trzin Tsering Rinpoche. *Mani Kabum*, vol. 1. n.p.

Ujeed, Sangsereima. *The Thob yig gsal ba'i me long by Dza-ya Paṇḍita Blo-bzang 'phrin-las (1642-1715) : An Enquiry into Biographies as Lineage History*. Ph.D. Dissertation from Uni-

versity of Oxford. 2017. <https://www.tsemrinpoche.com/download/Biographies-Autobiographies-Works/en/Sangseraima%20Ujeed%20-%20An%20Enquiry%20into%20Biographies%20as%20Lineage%20History.pdf>. 2019年7月1日 ダウンロード。

Waddell, L.A. “The Indian Buddhist Cult of Avalokita and his Consort Tārā the Saviouress-illustrated from the Remains of Magadha.” In *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*. 1894. pp. 51-89.

註

- 1 横殿 2018b。
- 2 MKB, fols. 140a4-145a2, pp. 279.4-289.1pp. 279; cf. 英訳は Trizin Tsering Rinpoche (2007: 467-474) を参照のこと。
- 3 MKB, fols. 167b5-183b5, pp. 334.5-366.5; cf. 英訳は、Trizin Tsering Rinpoche, (2007: 523-547) を参照のこと。
- 4 Waddell, 1894: 61-62.
- 5 'Khrungs rabs kyi zhing bkod 'bri tshul gyi rtogs brjod kha byang dang bcas pa gsal ba'i me long. pp. 827-857.
- 6 Ujeed 2017: 199.
- 7 明澄鑑 (p. 830.2-7): yul sgra can na rgyal po sgra dbyang rnga sgra'i sras su 'jig rten dbang phyug 'khrungs pa'i tshe llo bcu drug lon pa na | sangs rgyas 'od mdzad ye shes tog gi drung du byon pa'i lam khar nyi zla'i sgron ma dang nam mkha'i sgron ma gnyis kyis btsun mo bya bar gsol zhing | sangs rgyas la utba la dang dong rtse phul te sems bskyed do ||; cf. Ujeed. 2017: 201, n. 227: Ujeed 2017はフィリップ・ピアス氏によりご教示いただいた。謝意を表する。
- 8 MKB (fol. 141a2-3, p. 281): lo bcu drug lon pa na sangs rgyas 'od mdzad ye shes tog gi spyang sngar 'gro ba'i lan du | bu mo nyi zla'i sgron ma dang | nam mkha'i sgron ma gnyis dang phrad de | de gnyis ka nga'i btsun mo la rab tu dga' ba la |.
- 9 MKB (fols. 168b2-169a5, pp.336-337): . de nas rgyal bu de cher skyes te lo bcu drug lon tsa na |...rgyal bu de byang chub kyi shing drung du sangs rgyas ye shes 'od mdzad tog la mchod pa la phyin pa'i lam khar / bu mo lta na sdug pa gnyis dang phrad pas | bu mo gnyis na re | rgyal bu gar gshegs zer | rgyal bus nga sangs rgyas la mchod pa byed du 'gro byas pas ... rgyal bus bu mo gnyis dang 'grogs nas | sangs rgyas ye shes 'od mdzad tog can du phyin te | rgyal bus gser gyi dong tse dgu phul / bu mo gcig gis me tog u dumwāra bdun phul | gcig gis padma lnga phul nas byang chub kyi mchog tu sems bskyed do ||.
- 10 明澄鑑 (p. 831. 7-21): sras 'jig rten dbang phyug rgyal sar bskos te sbyin pa rgya chen po btang pas | phrag dog dang ldan pa'i rgyal po shing khri can gyis | nor bu dgos 'dod 'byung ba slong bar btang ba bzhin byin pas | sras yab yum rnams bdud ri nag po bya rog sgra gcan zhes bya bar spyugs | de'i tshe lam du yang bzhon pa | rgyan gos rnams kyang slong mo la byin | shul lam zhig tu lhas gzhal yas khang sprul nas mchod pas | btsun mo gnyis der bzhugs par 'dod kyang yab kyi bka' mi bcag pa'i slad du byon | der bye ma shing drung nas 'ongs pa'i bram ze la sras ming sring yang byin | de las brten nas yab yum rnams dang | yul de'i lha klu gzhi bdag rnams kyis 'dud shing lphyogs bcu'i sangs rgyas dang byang

chub sems dba' rnam kyis spyang chab bton pa gcig tu 'khyil ba mtshor gyur pa'i dbus su
pad sdong gi me tog rnams la snags rgyas re re bzhugs pa dang | 'ja' 'od 'khyil ba'i ltas ya
mtshan du byung | brgya byin gis nyams tshod sad par btsun mo byin kyang slar phul | mi
ring bar rang yul du spyang drangs te sras 'od zer tog rgyal sar bko ba sogs dga' ston byas
so ||.

- 11 セーレンセン (Sørensen 1994) はソンツェンガンポ王の伝記を含む複数のチベット語文献の
詳細な平行句研究を行っている。
- 12 *Vessantata Jātaka*. Fausvöll 1896: 486.31-32: *Hadayam dademyam cakkhum pi mamam pi
ruddhirm pi ca dademyam kayam savetva yadi koci yacaye mamam*.
- 13 MKB (S, fol. 169a4, p.337.1): srog la bab kyang rgyal bu'i sbyin pa la gegs mi bya ba.
- 14 Bacot 1914: 283.
- 15 Bacot 1914: 273.
- 16 法華経「普門品」で言及される、船乗りとシンハラ島の魔女についての話はアジア全域に
広まっている。Cf. 岩本一九七八、一三六頁、一四七―一四九頁；Lienhardt 1985.
- 17 不明。
- 18 野生動物の一種。
- 19 原文は、'o ma brgyal lam である。brgyal は「気を失う」という意味であるが、'o ma を
「牛乳」と取って、文意が続くように訳した。
- 20 ナンリ・ソンツェンはソンツェンガンポ王の父である。

キーワード

マニ・カンブン、観自在菩薩、ヴェッサンタラジャータカ、ダライ・ラマ五世、
ソンツェンガンポ王、人身布施、布施波羅蜜

付 記

本稿は『パーリ学仏教文化学』第三十二号（二〇十八年）から刊行された拙論の後続となる
ものである。論文の一部は第十五回国際チベット学会（The Fifteenth Seminar of the Interna-
tional Association for Tibetan Studies at Paris）での発表に基づいている。本稿は二〇一八年度
から継続する本年度の科学研究費補助金基盤研究C（課題番号18K00066）の成果の一部を成
す。